

沖縄文学の地平



岡本恵徳

三一書房

岡本恵徳

一九三四年 沖縄県宮古郡平良市に生れる。
一九五六年 琉球大学文学部国語国文学科卒業。
一九六三年 東京教育大学大学院文学研究科修士課程修了。
一九六六年 琉球大学教養部講師となる。
一九七二年 同大学法文学部助教授となり現在に至る。
著書 『現代沖縄の文学と思想』（沖縄タイムス社）
住所 沖縄県那覇市首里大名町二の七六
電話 自宅 ○九八八―八五―三三八四

沖縄文学の地平

一九八一年十月三十一日 第一版第一刷発行

著者 岡本恵徳
発行者 菊地喜三次

発行所 株式会社 三一書房

東京都千代田区神田駿河台二の九
電話 ○三(二九)三三三番
振替 東京 九一八四一六〇番
郵便番号 一〇一

印刷所 第一印刷株式会社
製本所 東京美術紙工
落丁・乱丁本はおとりかえいたします

沖縄文学の地平

目次

I 章 沖繩文学の視点

- 一 近代の沖繩における文学活動 7
- 二 戦後沖繩の文学 28
- 三 一九七〇年代沖繩の文学 50
- 四 沖繩戦戦記について 62

II 章 沖繩文学の側面

- 一 山之口貌断想 85
- 二 大城立裕の文学と思想 96
- 三 戯曲「神島」の問題 104
- 四 「やさしい人」小論 109
- 五 長堂英吉作「洗骨」に寄せて 118
- 六 沖繩民衆の怨念
——「わんがうまりあ沖繩」を通して 122

III 章 沖繩文学の諸問題

- 一 「滅びゆく琉球女の手記」をめぐる 137

二	『夜明けの門』について	141
三	『ある神話の背景』をめぐって	149
四	「偉大なる祖国アメリカ」論	159
五	『沖縄ノート』論	167
六	『琉球弧』の視点	177
IV 章	戦後沖縄文学の諸相	
	戦後沖縄文学の諸相	185
	初出誌一覧	253
	あとがき	255

I 章 沖繩文学の視点

一 近代の沖縄における文学活動

はじめに

本稿は、明治のいわゆる「琉球処分」以後、太平洋戦争によって戦場と化すまでの、沖縄の文学活動のあらましを展望したものである。

周知のように、沖縄の近代以後の歴史は、日本のなかでもきわめて特殊な過程をたどっており、それは太平洋戦争後の現在まで続いている。そのことが沖縄の文学にもさまざまな影響をあたえているが、本稿は、このような事情が文学の上にどのようにあらわれているかを主として確認することになる。

明治以後、日本の近代化の過程で、その一地方に組みこまれた沖縄は、文学の面でも中央文壇文学の深い影響のもとでその活動を行うことになるが、山之口獺など少数の例を除いて、すぐれた文学者を生みだしたとはいえない。したがって、結局は前述のように、沖縄の文学活動を具体的にたどることで、沖縄の近代以後の文学の事情を明らかにすること以上に、筆はすすめられないのである。

また、戦火にみまわれた沖縄では、資料の面でも多くの焼失・損傷があり、文獻的に確かめることのできないことが多い。したがって本稿では、現在確認できる資料にもとづいて、これまで明確でなかった文学活動の具体的な状況を明らかにすることを重点にまとめてみたいと考える。なお、紙幅の都合で、明らかなものでもとりあげる作品や作者が限定されるので、本稿にとりあげたもののみに、沖縄の文学活動が限定されているわけではないことを、あらかじめ断わ

っておきたい。明治以後の文学活動の歴史、その独特なありかたは、太平洋戦争敗北後、米国の軍事占領支配下にあった一九四五年以後の文学活動にも大きく影をおとしているけれども、このことについては、別の機会にとりあげることとして、本稿では、叙述の対象を、前述のように昭和十年代末までとしたいと考える。

一 文学的環境

沖縄の近代における文学は、沖縄の近代の歴史的な過程と密接なかわりを持っている。いうまでもなく、近代の文学の特質は、その国の歴史的な過程に深く規定されているのであって、これは、なにも沖縄に限られるわけではない。が、沖縄の場合は、その近代の歴史的な過程が、日本の中でもきわめて特殊な過程を歩んだのであって、そのことが、沖縄の明治以後の文学に深刻な影響を与えているのである。

沖縄の近代の歴史的過程については、ここで多くふれることはできないが、このことをぬきにして、また沖縄の近代の文学について検討を加えることは不可能であるから、はじめに、ごく簡単にそのことについてふれておきたい。

明治以前の沖縄が、薩摩藩の実質的な被支配国であり、表面においては中国に朝貢する独立国であったことは、これまでさまざまなところで指摘されてきたことである。

ところで、薩摩藩に実質的に支配されていた琉球は、明治十二年のいわゆる「琉球処分」によって明治政府の統治するところとなった。そして、この明治十二年の「琉球処分」によって、沖縄もいわば「近代」の歴史的な過程に歩を一歩ふみ入れることとなるが、この明治政権の沖縄統治は、専ら国家的な統一と対外的な領土権の確保を至上目的としており、その目的を達成するために強権的な統治政策を中心としたことが、沖縄における近代化の過程にさまざまな陰影を残すこととなった。

こういう歴史的な過程が、歴史や文化的伝統とのかかわりのなかで、人々の意識に複雑な屈折を与えている。そしてこういう意識の屈折が、意識活動の独自な所産である文学作品の上に、よかれあしかれ大きく影響を残したのは、その

意味ではきわめて自然であったというべきであらう。

この意識の屈折は、沖縄と日本本土の歴史的な展開のもとで生じたであろう社会的・文化的な相違、そしてその反映としての「異質感」を前提としており、その前提のもとで大きく類別して、二様の異った態度を生みだしている。

その一つは、明治政権のもとでの「国民的統一」を積極的に受容しようとする態度である。これは、国民的統一を積極的に受容し、沖縄を本土の他の府県と同様な地点にまで高めることで、近代的な統一国家の一員としてふさわしいように、本土と沖縄の間に存在する社会的・文化的な異質性を一挙に解消しようとするものであった。そして、この意識のもとでは本土⇨先進的・高度な文明を保持する地域、沖縄⇨前近代的な停滞と桎梏の支配する地域という類型的発想が強く、異質性を克服することが、そのまま沖縄の伝統的な生活様式・文化の自己否定を通して、本土と同質化しようとする試みとしてあらわれるのであった。

それに対して、他の一つは、薩摩藩の収奪及び明治以後も続けられた日本政府からの強権による抑圧と差別的支配に対する反発と、沖縄・本土間に存在する異質感とを結びつけることで、沖縄の独自性を強調しようとする態度を持つものであった。この態度は、沖縄の伝統的な文化を強調し、新たな差別に対抗しようとして、とりわけ沖縄の文化を洗練されたところとらえようとしたため、主として琉球王朝（首里王府）の支配する時期を回顧的に美化し、そのことによって沖縄の独自性に固執する傾きを示している。

以上のように、明治以後の沖縄の人々の意識は、大きく二様に類別されるが、実際には、このような本土に対する反発と吸引というふたつのはざまで複雑に屈折していたのである。すなわち、同一の人物の内部においても、この二様の吸引と反発が同時に存在し、時によってそのいずれかが外化されるという場合が多く、そのいずれが表面化されるかは、その個人の置かれた外的状況とのかかわりかたによることが多いといえるのである。したがって、これはたとえば、本土に対して吸引されつつも一方において反発し、さらに反発する自己を否定的に抹殺しようとするというような二重・三重の屈折としてあらわれることもあったのである。

しかしながら、このような二重・三重にも屈折する意識は、日本が、近代的統一国家として国際的にその位置を高め

るとともに、国内的には画一的な文化の集中や、地方に対する中央の文化の浸透にともない、沖縄においてもその独自の社会的・文化的性格を強調しようとする態度は急速に失われていった。あらためて沖縄の独自の文化が強調されとらえ直されるのは、太平洋戦争後、沖縄が日本から切り離され、米国の軍事基地として植民地的な収奪のもとに置かれて後のことである。

これまで述べてきたように、沖縄の明治以後の文学は、沖縄の人々の持つ複雑な意識の屈折に深く規定されているのであるが、このことと関連して、注意されるものに、沖縄の言語活動と、教育のありかたがある。

まず、教育のありかたについて述べるならば、明治十二年の「琉球処分」以後、近代的な統一国家の国民として沖縄の人々を組み入れる為に最初に行われたことは、教育制度、とりわけ小学校教育の強化であった。日本帝国の忠実なる臣民として沖縄の人々を育てる為に、このことは不可欠の政策であったのである。

この小学校教育の強化普及と表裏して、これもやはり国民統合の不可欠の手段として言語教育（共通語教育）の徹底が図られる。これは、祖語を共通に持っていたとしても千年余の歴史的な発展の相違によって、異った言語を保持するかにみえる沖縄を、統一的な国家のうちに組みこむためにとられた、明治政権としては不可避の政策であった。これは、明らかに、明治政権の沖縄に対する強圧的な政策のひとつのあらわれであったが、一方沖縄においても、この政策をむしろ積極的に受容し、沖縄人自身の手で言語教育を徹底しようとする動きも強かった。この時期の沖縄の人たちが、何故このように積極的に受容したか、ということについては、さまざまに論議を呼ぶことであるが、ここで明らかに言えることは（結果論的な言いかたではあるが）、当時の沖縄の人々にとって「近代」はいわゆる「標準語」と不可分に結びついていた、ということであろう。

歴史的にかなり遅れて、さらに日本の国家的統一の枠組のなかで、初めて「近代」化への過程をたどることとなった沖縄の人たちにとっては、「近代」は、日本なканなく東京を通過することによって接触することが可能となるものであり、したがって近代をみずからのものとするためには、「標準語」の習熟が必要な前提であった。おそらく、琉球方言によつては、近代的な思考や論理を自己のものとして獲得することが絶望的なほど困難であると感じられる状況が存

在するために、「標準語」の習熟は、欠くことのできない条件と考えられたにちがいない。

沖繩において、啓蒙家的立場から、近代化を積極的に推し進める役割を果たした知識人の多くが、東京に遊学し、そこで身につけた新しい思想をもった人たちであったことも、このことと深くかかわっているといえる。

二代目沖繩県令上杉憲茂の施政下にあった明治十五年、沖繩から初めての県費留学生として、太田朝敷、高嶺朝教、謝花昇ら五人が上京して高度の専門的な学問を身につけてのち、官費であるいは私費で上京し専門教育を学ぶことが沖繩の知識人の一般的なコースとなったのである。そして、これらの東京での専門教育を学ぶことのできた人たちによって、沖繩の近代化の過程は主として担われたといつてよい。

むろん、このように概括してしまうと、歴史のリアリティは失われることが多い。たとえば、明治政権の強圧的な施策のもとでの、旧首里士族の系統をひく人たちと、庶民階層の出身者の間における思想の相違や政治的対立も存在したし、そのことが沖繩の明治以後の歴史に多くのジグザグな軌跡を残すことになったことも事実である。また同じく庶民階層の出身者とは言え、上京して高度な専門的な知識を身につけたのち、帰省して啓蒙家的役割を果たすことのできた人たちは、庶民階層の中でも経済的に富裕な、社会的には中流の上層に属する家庭の出身者であったことも否めないし、そのことが、沖繩の明治以後の歴史に大きく影響したことも考えられるのである。さらに付け加えて言うならば、沖繩における近代化の過程が現実化され始める明治二十年代以後、沖繩の近代化の中心を担った知識人たちの接触することのできた「近代」は、中央（東京）においても、天皇制が確立し中央集権的な政策が強められていく過程で定着しつつあったものに他ならなかった。が、沖繩という中央から隔絶された地域に住んで、近代以前の停滞的（と感じられる）文化や生活の中で生きた当時の若い知識人たちにとって、そのような日本の近代、とくに明治二十年代以後のありかたを問いかけることは困難であった。彼らはおそらく東京のめくるめくばかりの文化の中に「近代」のあかしを感じ取ったに相違ないし、そのような彼らにとって、沖繩の近代化は、そういう中央の文化の質にみずからを近付け、中央の水準にみずからを高めることによって実現されることであったのである。

このような状況は、さらにその後もひき続きみられる。多くの指摘にみられるように、政治的・社会的には、明治三

十年代とりわけ明治三十六年の土地整理事業の完了を経て、大正九年「府県制・市町村制及び選挙法の特例がすべて撤廃されて、わが沖縄が制度の上においても他の府県と同様とな⁽¹⁾」るのであるが、こういう特殊な歴史過程のなかで醸成された意識は、早急に払拭されることもなく、昭和の十年代まで強く残るのである。

以上のような近代化の過程にみられるさまざまな特質は、沖縄の文学の上にも強くあらわれる。「近代」の文学が、よかれあしかれ近代的な思考や論理を根底にして成り立っている以上、その文学が「近代」の現実化を志向の機軸とする方向性を持つことは避けられないし、そのため、これまで述べてきたような沖縄の近代化の過程の特異なありかたに、強く規定されるものになったといえるのである。

二 文学の展開

「近代」の文学の起点をどこに求めるか、ということについては、種々な面から捉えることができるし、それはまた作品自体によって求めなければならないことも、あえて言うまでもない。が、前節で述べたように、日本の全国的な統一が成立し近代化への過程がかなりの程度進んだのち、それからしばらく（凡そ二十年近くも）遅れて、その過程のなかに組みこまれた沖縄の場合には、その時間的な遅れ（これは、沖縄支配に対する主として沖縄の旧士族階層の抵抗を柔らげるための旧慣温存を基本とした明治政権の政策によるところが多いといわれる）とその過程の独自のありかたは、その文学の成立自体にも大きくかかわりを持っているのである。そこでは、すでに述べたように、近代は既に中央（東京）において現実化されたもの、もしくは現実化されつつあるものであり、沖縄の近代も、それに近づくことによって可能となるものとみられたのであるから、文学においても、中央の文壇文学において完成された質と水準に近づくことを至上目的とするものとなった。

沖縄においては、とにかくにも、明治政権による支配以前においては、「近代」は存在しなかったのであって、近代化を志向する限り（むろん明治政権の国家的統一の枠組の中においては）近代はこのようなかたちをもってのみ成立すると

考えられた。すなわち、沖縄における近代的な文学の成立は、中央の文壇文学をみずからのものとして摂取し、それをモデルとして表現を試みるころにあった。

そして、そのためには、近代の理念を身につけることもさることながら、共通語の習熟も不可欠の条件であって、したがって沖縄の近代的な文学の成立を担ったのはそのことの可能な、主として東京での生活体験を持つ若い知識人たちであった。

沖縄の近代の文学の成立は、そのためにかなり遅れて、明治三十五・六年にようやくその胎動を始め、明治の四十年代に入って、定着するのである。そして大正年代に入ると、中央の動向が間を置かずにそのまま沖縄の文学を志す人々に直接的な影響を与えるようになるのであり、この状態は、敗戦によって沖縄が米国の支配下に置かれる昭和の十年代末まで続くのである。

したがって、ここでは、このような文学の展開の様相を念頭において、明治三十五・六年以前の転換期と、明治三十五・六年頃から明治の終りまでの第一期、大正から昭和十年代に至る第二期に区分して、その展開の諸相を概観したい。むろんその区分は、あくまで一応の便宜的な区分にしかすぎない。文学のジャンルによって、それぞれその時期に多少の出入の生ずることはいうまでもない。

1 転換期（明治三十五・六年以前）

前節でふれたように、実質的な内容をさておいて考えるならば、沖縄の近代は、明治十二年の「琉球処分」から始まるといえようが、その琉球処分から明治三十五・六年までの文学は、それ以前の文学活動の形態と内容をそのまま踏襲していたものと考えられる。

明治以前の文学については、ここでとりあげることはできないが、「おもろ」が現実的にうたわれなくなったのちは、「琉歌」が沖縄の文学の中心をなしてきたといえよう。しかし、おそらく薩摩の琉球支配以後、和歌その他の和文学が首里王府を中心に多く受容され、琉歌にも大きな影響を与えたことは否定できない。この時期には、首里王府の士族階層を中心に「琉歌」と「和歌」が盛んに詠まれたであろうことは容易に推察される。

このような文学活動は、明治に入ってもなおそのまま持続されたであろう。また、この時期は、近代的な文学活動の前提となる大衆的な発表機関も存在しなかったのであるから、このような文学活動も、少数の人たちが発表し同時に享受するという同好者の結社として活動したであろうことも推察される。

ところで、このような大衆的な発表機関が沖縄において登場するのは、明治二十六年の『琉球新報』の創刊によってである。これは旧首里王府と深いつながりを持つ人たちの手になるもので、それらの人たちの明治政権の支配⁽²⁾下において生ずる政治的・社会的な利害や立場と密接にかかわっていたと指摘されるが、この『琉球新報』の創刊によって、大衆的に文学が発表されかつ享受される契機が生まれたといえる。

明治二十六年の新聞の登場は、文学の大衆化、一般化の前提となるものではあったが、明治三十五・六年頃までは充分にその機能を文学の面では果たしていない。この時期の文学活動は、和歌・俳句・漢詩・琉歌が中心となっているが、いずれも「同風社」（和歌・琉歌）、「如風会」（俳句）、「泉崎同志会」（和歌）、「花月吟社」（琉歌）などの結社が、月次会などで詠んだ作品を、新聞の片隅に発表するという程度のものであった。新聞も文芸欄として紙面を割くだけの余裕はなく、小さなコラム欄に「詞林」「文苑」と名付け、それらの作品を発表するにとどまっている。

この時期の文学活動は、このように結社を中心としており、それに参加する人たちも、旧士族階層のほか新しく他の府県から沖縄に赴任した役人や寄留商人とその家族などに限られたものであった。したがって文学活動とはいえ趣味的なものにとどまるのであって、作風も旧い形態と内容をもつものであった。

朧夜の月にはそれと分ねども

にはひに梅のあたりをぞしる

（津典兼綜）

大君の御代の光りに靈魂の

まよふ暗路もあらじとぞおもふ

（護得久朝置）